



倪瓒一系集

三





俳詠一葉集附合之部二

古學庵俳号

幻窓 湖中

坎窩 久臧 校

貞享元甲子冬

翁

狂句本枯の身六竹言かり似たる可れ  
 たるわとげしる望け山原花  
 其のの主水子海屋位とせと  
 可しらね家をふしと赤  
 釣解のふとくすまの白のあふ  
 白のらて（平沙平米を 荊

野水 若号 重五 杜因 正平



系虎ハ海ノ子ト有リテハ  
髪ヲヤサシクシテ其ノ  
仍レテ〜〜〜乳を食フ  
消ぬ卒却儻々すこと  
わけは〜〜〜火を焚  
河〜〜〜  
田中〜〜〜小主人ハ  
芳子舟ハ〜〜〜人ハ  
〜〜〜様を様子後ハ  
味さ〜〜〜  
二の危子返情の花の  
蝶ハ〜〜〜とさ〜〜〜

水 五 翁 号 玉 水 号 玉 翁 号 五 翁 水

〇 物ヲ〜〜〜  
今了〜〜〜  
ゆす人ハ〜〜〜  
志ハ〜〜〜  
望ぬ〜〜〜  
あ〜〜〜  
鳥〜〜〜  
あ〜〜〜  
秋水一斗〜〜〜  
日東の李白〜〜〜  
巾子〜〜〜

五 翁 号 玉 水 号 玉 翁 号 五 翁 水







初也の事や嫁仕の先く  
禿心くらお喜かかゆき  
梧筍<sup>二</sup>餅すゆ<sup>一</sup>室作の<sup>二</sup>あ  
く<sup>一</sup>ひ<sup>二</sup>起<sup>一</sup>上<sup>二</sup>致<sup>一</sup>留<sup>二</sup>も<sup>一</sup>  
漁<sup>二</sup>深<sup>一</sup>く<sup>二</sup>楮<sup>一</sup>を<sup>二</sup>種<sup>一</sup>の<sup>二</sup>基<sup>一</sup>平<sup>二</sup>き<sup>一</sup>  
之<sup>二</sup>強<sup>一</sup>可<sup>二</sup>ん<sup>一</sup>不<sup>二</sup>破<sup>一</sup>の<sup>二</sup>再<sup>一</sup>人  
是<sup>二</sup>す<sup>一</sup>了<sup>二</sup>美<sup>一</sup>流<sup>二</sup>を<sup>一</sup>あ<sup>二</sup>る<sup>一</sup>基<sup>二</sup>を<sup>一</sup>志<sup>二</sup>  
紗<sup>二</sup>と<sup>一</sup>先<sup>二</sup>し<sup>一</sup>此<sup>二</sup>さ<sup>一</sup>了<sup>二</sup>と<sup>一</sup>七十  
な<sup>二</sup>か<sup>一</sup>め<sup>二</sup>す<sup>一</sup>法<sup>二</sup>事<sup>一</sup>を<sup>二</sup>志<sup>一</sup>あ<sup>二</sup>る<sup>一</sup>心  
ひ<sup>二</sup>し<sup>一</sup>の<sup>二</sup>傘<sup>一</sup>の<sup>二</sup>い<sup>一</sup>こ<sup>二</sup>そ<sup>一</sup>う<sup>二</sup>さ<sup>一</sup>す  
道<sup>二</sup>は<sup>一</sup>り<sup>二</sup>後<sup>一</sup>の<sup>二</sup>子<sup>一</sup>あ<sup>二</sup>ふ<sup>一</sup>又<sup>二</sup>ま<sup>一</sup>ら<sup>二</sup>れ  
ま<sup>二</sup>つ<sup>一</sup>つ<sup>二</sup>存<sup>一</sup>ね<sup>二</sup>を<sup>一</sup>海

水 小 号 五 五 翁 五 水 翁 号 水 小

か<sup>二</sup>り<sup>一</sup>た<sup>二</sup>し<sup>一</sup>る<sup>二</sup>庭<sup>一</sup>梅<sup>二</sup>の<sup>一</sup>髪<sup>二</sup>の<sup>一</sup>あ<sup>二</sup>の<sup>一</sup>れ<sup>二</sup>  
志<sup>二</sup>き<sup>一</sup>ぬ<sup>二</sup>理<sup>一</sup>臨<sup>二</sup>海<sup>一</sup>を<sup>二</sup>中<sup>一</sup>山  
秋<sup>二</sup>探<sup>一</sup>れ<sup>二</sup>志<sup>一</sup>を<sup>二</sup>志<sup>一</sup>き<sup>二</sup>く<sup>一</sup>静<sup>二</sup>さ<sup>一</sup>ハ  
着<sup>二</sup>の<sup>一</sup>穿<sup>二</sup>つ<sup>一</sup>つ<sup>二</sup>ふ<sup>一</sup>糸<sup>二</sup>を<sup>一</sup>山<sup>二</sup>ら<sup>一</sup>中  
被<sup>二</sup>よ<sup>一</sup>つ<sup>二</sup>祝<sup>一</sup>を<sup>二</sup>ひ<sup>一</sup>き<sup>二</sup>山<sup>一</sup>可<sup>二</sup>け<sup>一</sup>す  
ひ<sup>二</sup>し<sup>一</sup>の<sup>二</sup>興<sup>一</sup>作<sup>二</sup>の<sup>一</sup>鳥<sup>二</sup>の<sup>一</sup>内<sup>二</sup>竹<sup>一</sup>可  
三<sup>二</sup>ウ<sup>一</sup>の<sup>二</sup>也<sup>一</sup>窮<sup>二</sup>終<sup>一</sup>尾<sup>二</sup>長<sup>一</sup>好<sup>二</sup>と<sup>一</sup>軍  
し<sup>二</sup>ら<sup>一</sup>み<sup>二</sup>し<sup>一</sup>ら<sup>二</sup>む<sup>一</sup>越<sup>二</sup>の<sup>一</sup>宿<sup>二</sup>信<sup>一</sup>前

号 翁 水 五 翁 五 水 翁 号

杖<sup>二</sup>を<sup>一</sup>ひ<sup>二</sup>き<sup>一</sup>る<sup>二</sup>山<sup>一</sup>の<sup>二</sup>十<sup>一</sup>歩  
は<sup>二</sup>み<sup>一</sup>の<sup>二</sup>月<sup>一</sup>の<sup>二</sup>霞<sup>一</sup>水  
水<sup>二</sup>の<sup>一</sup>ゆ<sup>二</sup>く<sup>一</sup>ふ<sup>二</sup>の<sup>一</sup>あ<sup>二</sup>ら<sup>一</sup>る

杜 園  
重 五







あゝ人を行をも枯り飲ほさん  
けしらのひとくちをこころす  
三つ内よあそくく種あ  
秋の雨出り野之く  
意下もゆりしはあを放る  
あふよふ念佛 蕪も隔る  
朝くすもあけけし起休  
わらふもあも秋の春引  
そわれ花玉のあつる入  
母 愛はれりそあもあ

新波流るり河し火くくあ

五 水 玉 号 水 号 水 号 水 号

すけい

あゝ里の村のあゝあゝあゝあ  
人のあゝあを 後 庵 中  
花 棘 了 骨 の あ り 吸 之  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあ  
風 吹 ぬ 秋 の 白 瓶 子 酒 ちや  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあ

重五

五 水 玉 号 水 号 水 号 水 号



火をぬ火焼く人をも  
門をのりて残る可く  
血刀をくくし  
老方下る本郷の  
そまの  
花より梅の  
信もの  
白蓋  
宜青  
八十  
あ  
西

五号水玉翁  
五号水玉翁  
五号水玉翁  
五号水玉翁  
五号水玉翁

あまの  
妹の家  
箱籠  
依り  
つ  
子の  
や  
泥  
粥  
将  
水の

五号水玉翁  
五号水玉翁  
五号水玉翁  
五号水玉翁  
五号水玉翁



新しき娘言をもせしむ村向 小

田家賦堂

三行号

雲月や霧のつくく（無ひびき）  
 其の如きはあられあけり  
 櫻槍山家の傳は本葉傳  
 ひやす。牛の培はけり  
 音もあか具足は力なり  
 酌とる童景きりにいて  
 秋の源流の流きあひて  
 やくくはく不二尺ゆき寺  
 病とくは枝の木のあけり

翁  
 重五  
 杜園  
 野水  
 号  
 小

雲月や霧のつくく（無ひびき）  
 其の如きはあられあけり  
 櫻槍山家の傳は本葉傳  
 ひやす。牛の培はけり  
 音もあか具足は力なり  
 酌とる童景きりにいて  
 秋の源流の流きあひて  
 やくくはく不二尺ゆき寺  
 病とくは枝の木のあけり

五  
 水  
 笠  
 号  
 翁  
 五  
 玉  
 笠  
 水  
 翁  
 号  
 小



伊香子 逢むあのみくさう  
 舞う思ふの小角豆のあまりし  
 萱花 まるくは炭素つく白  
 芥子の尾の小坊きし 望むおちこ  
 打る花の宮まゝの望みのみ  
 新さの飯基のそく月の家  
 高神く 孤風やまゝしき  
 物林子 松根子のあまの片底  
 豆 越つゝゝゝ 母の表子入  
 元 どのまは 綾の被ぬく  
 体 足木 膝の 膝のぬき  
 いろ 海女 男 猫ひらも 折魚

五 水 笠 子 篇 五 篇 五 篇 五 篇

喜の志すすれを掃をよふ  
 あり干をまのの聖わの  
 山 夢を 白く 望みの 木く

五 水 笠

同

いづれとてはまふまをす  
 杉 火 年 河 中 枯 系 小 松  
 木 枝 下 下 下 髪 を 葉 笠  
 檜 葉 干 字 を 屈 川 中 勢 勢  
 浪 干 蛤 か ら ん 月 小 海  
 ひらくに 橋をすすす 坂阜山

野 水 篇 杜 重 五 篇 五 篇

羽笠



同年臘月十九日

海客の影の夜半の白く  
串に鱈をとりし  
二百年系山を寄取く  
櫻の舞まじり秋を暮らす  
入月を影けきり  
かきまよふ玉を家世をわたり  
河をえむる母のあはれ  
一輪の影を  
棋の工丈二白とら  
月を影けきり  
雲を影けきり

桐葉 東藤 二山 紫 山 紫 山 紫 山

華表をけりし  
笠を影けきり  
秋の鳥の人  
を影けきり  
を影けきり  
を影けきり  
美人のかし  
城東の聲  
生海角を  
木戸を  
鼓を  
を影けきり

山 紫 山 紫 山 紫 山 紫 山



糸子あきし 痛のましあひ  
不二の根と望見するやうあう  
宿のゆく都のひともあしむ  
中んあきし後を思ひ出す粧ひ  
衣うらく小姓あきの戸を押  
月向く時計のひさきハッ写  
粧いそくまきえうの 家  
破れし具足をもあきけりけり  
う集のあきしえりけりけり  
紅梅のあきし花のあきを紋  
らひしあきしのあきけりけり  
まあの新あきしあきけりけり

紫山翁 紫山翁 紫山翁 紫山翁 紫山翁

まき子らうす 家の摺り

紫

あきあきしあきあきあきあき  
あきあきしあきあきあきあき

雷枝 翁

あきのあきあきあきあきあき  
あきあきしあきあきあきあき

勝延 翁

あきのあきあきあきあきあき  
あきあきしあきあきあきあき

塔山



すききり雲の如し 桐葉 四十 一 翁

雲をふかしの如く 故帳を巻きし 如行 翁

翁 夏夜涼しく 赤きへんを 大いなる 桐葉  
檜の葉をまきし ちのちの やさしく 翁  
移一つ ちのち 足はみゆく 翁

志のちん 松を解く ちのちの ちのち 翁

志のちん 松原 大 松 桐葉

ちのちん 松を解く ちのちの ちのち 翁

本松のちん 松を吹かす 翁 閑水

松のちん 松を吹かす 翁 東菰

松のちん 松を吹かす 翁 桐葉

木枯のちん 松を吹かす 翁 東菰



まゝ〜〜〜垣おのり路さや  
ゆる〜〜〜新を〜〜〜内のも  
ゆる〜〜〜ハ〜〜〜去る〜〜〜船  
是

叩端  
如行  
工山

能作と〜〜〜積〜〜〜か〜〜〜好よ〜〜〜美の〜〜  
その〜〜〜つれ〜〜〜と〜〜〜風を〜〜〜流〜〜〜

木因

貞享二乙丑年

三月廿七日

何と〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

篇

海堂 巻々 性ゆ〜〜〜 凡  
田畑〜〜〜 妹の〜〜〜 童の〜〜〜 阿〜〜〜  
上 大〜〜〜 下 大〜〜〜 中 大〜〜〜  
月〜〜〜 童の〜〜〜 叔 桐の〜〜〜 物 すけ  
酒の〜〜〜 姨の〜〜〜 母の〜〜〜 父  
又〜〜〜 父の〜〜〜 母の〜〜〜 子  
琴 瓜 糸 玉 袖 の ち ち ち  
髪 ね ち ち ち ち ち ち ち ち  
母 の せ せ の ち ち ち ち ち ち ち ち  
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

叩端  
桐葉  
篇  
編  
葉  
篇  
葉  
篇  
葉  
篇  
葉  
篇



燈火風とさのふ紅お 四  
川激ゆき撃と角と流こけ  
令利とと 漕手おのうらよ  
かこきう石の湯すの花久  
二 胸おき海ととく 糧や  
高よみきやう春おらうら  
枕 屏風の終り 候とみ  
おのれ一 浦のいろえのきさう  
三 段の舟 浦川の 萩  
危位やひく 杜律とあひく  
花うけうらう 竹とやのきさ  
いこき 鶴ハ吹ををわいさう

紫 紫 紫 紫 紫 紫 紫 紫 紫 紫

水汲小作袖ひやう  
月あき少板とを魚とらん  
やハ夜冷の流とらむら  
村のそき物とらむら  
ひく 鬼の瓜とらむら  
三 足ゆき人ハ舞とらむら  
男やもたの志とらむら  
風とらき大寺の萩の七つ  
海門とらき生鯉の巻  
岩盤とらき岩盤とらむら  
おとらき 砂とらき 岩盤とらむら

紫 紫 紫 紫 紫 紫 紫 紫 紫 紫



同日

つくと板のせみ油いらら  
ひくくまをいつい藪の一家  
夕氣山神那の雛をむくま来  
清多をすすらふる柄杓の月  
わらわらきぬまをこへつの上  
之のまをを 押さをもほら  
鼻残子おのまをまをけら  
まら大波子三升の降きく  
まらと徳道の焼く袖と尺上  
宿子ゆく鴨北四五百のま  
松風のひくまを海を飲ま

桐葉

篇

山端

山口

東森

山

篇

山端

山

山

山

佛 ときさむ 西谷の信  
鳥羽玉の髪き 女官をよんで  
まを尺破る 新の月の月  
秋ハ新 只者お物くらひら  
白子のまを 糸を方の海  
浪より 簪の骨を花裁く  
陰より 於那のからくまを  
望持く 雲をたぐりやき男  
玉守の塔の 月をみくら  
鶯鈴の尾を 蜘蛛の囀り掛きて  
風子 ぬを置らふの付死  
華より 杯の度ぬまを引挽め

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山







岸の岸くわゆる牛の通  
手ふくくききあふの岸の京  
からんのうてきふお老  
くすくききあふの岸の京  
祝のくくわゆる牛の通  
くくくくわゆる牛の通  
谷古風をうつく舟の古  
花あふきふくくく角夫余  
墓の泥をさす肩を  
出代の橋をさけくくお子位  
午時のあふくくく風古  
地雷火くく浪の赤きく

端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁

端の端くわゆる牛の通  
傳正けくくくくくく  
くくくくくくくくく  
お茶あふくくくくく  
松の気食の考くくく  
物あけけくくくくく  
花のくくくくくく  
端のくくくくくく  
風冷神くくくくく  
振あふくくくくく  
まあふくくくくく  
燈のくくくくく

端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁



湯きやの杖は度ふ本言  
花垣千重の喜葉引枝め  
これも角組まは端牛  
菊 菜 菊

同

那も心之木もや四月の板竹  
ふしの杖つく咀ぬま  
牛の子北乳をのむと新葉うそ  
かけろふとくろ竹の端欄  
傍つても葉の穂くつ角さう  
ひくくくけくくく竹の松  
岸くさくく溪の天宮を海魚く  
東蘇 桂楫 叩端 桐葉 工山 友

三回

狂歌の信千智をも只  
鼻残千流を流む女河う  
ふさけの市の上の絶く流  
等くつ歌の夏戸の窓の  
うをる 存れきーるあう  
水 菜 楫 水

同年六月二日東武於小石川無行  
涼きよの瀬くくくくく  
まき 雪 雪を尺くくくく月  
松風のたぐく美崎あけくく  
酒店の秋を厚子ゆき  
社々本まき 雪考の蝶くく  
清風 菊 嵐雪 其角 才丸



支碎 碑の更平 壺一  
臨のすくみうのうらまを  
を一息のほを二羽一  
棧造り物捕の籠を指を  
きぬのの衣をゆるぎ  
明のふれつくる人の  
古梵のせうに花四を  
ひろくし女を臨す  
引板を業をゆるぎ  
武古のものをすまき  
七里は毒の七里 秋風  
刃之の雷 南は女を化

箱 角 壺 風 壺 高 九 角 壺

槐の小きさく解くす  
臨陽の宿るすの飯を建  
狂女さるよふ法志とふ  
情一ふふの衣をの  
将く味ふ出羽の  
空月のこもるうらま  
枯るあつきのつら  
智多れを起しをゆるぎ  
三里とすえう不二  
扉をゆるぎあふか  
まをゆるぎ小の  
臨片とすう椽低く狭う

箱 壺 風 壺 高 九 角 壺



昔懐仰く歳子志しく  
これの能く存いそす一歳に先  
鐘を花多れいやはいひの聲  
あつてすす侍は志をたうとす  
おきりしとらちうとらち  
戸隠れいふ小家の静けさ  
河原梨ももてあはれ父の三年  
多敷よとくおれ自惚の一念屋  
舟子夜しいのちあきあふ  
雨そち川故き火いづく船  
雪花の所おもえを十身  
既すくも基すすれ人をさすむ

口腐 嘉善 風箱 空箱 九角 富堂 風箱 空箱

吟下言く白眼もやらの  
咲臨新千とらけ月よらよ  
海福福みんたのしむ秋  
枝の宿此價あつ小中静けさ  
くしとんえをさす美婦如き  
花あす玉々の風ハ侍のいり  
水糸をき丸山のま  
三尺の鯉子小能く料理の言  
とや魚好もをみくむはと  
幾回の戦い言や笑や  
逝水やとを控ぬものあハ  
白きのとらけ湯との十五白

角 九 富 堂 風 箱 空 箱 九 角 空 箱 風 箱 富 堂 九 角



紙水きよむる五郎入花  
伴もこい上戸も儀かくこ  
きちちあしし風うほく敷  
伊勢すくれ湯村の敷い  
入院尺あひ長う破と法  
一陽と雲正月さやう来  
ぬ様ようりひひひ  
湯屋のあししおひを  
志のふれみしお痛も  
くお孝こい紀川竹を  
名もあし取もこい  
后の月あし入尉あし

寺高丸角雲扇風堂高丸角雲

三  
みゆは狂討つておひひ  
忠をいれおひひ  
お女即小まんら大根曳下  
血もさく起情もさけ  
尺よよのあひ川ハ西むき  
湯河のあしおひひ  
汗涼ううう横了  
さうううお旅字案う  
ふりこいささく小奴の  
枝花もさいこい月あし

丸角雲扇風堂高丸角雲



効くことつらん何の一新  
研一と波に舟のまきと  
名 立神の如く是をいふと  
きれにその乳人の魂ハ  
麻布の病をいふと  
久治二事のちの石も  
みよれ数候と  
三日月の影西にた  
秋ハその影け  
神心もねハ

角丸雪翁風堂丸翁

只一眼も花ハ一  
持のくらきもさす  
定家うらなれ  
佐く候也を八  
梅の輪入の  
能を修ぬ不  
わりのう  
花障ハ  
さくくハ

角丸雪翁風堂丸翁



梅さくらしきゆのや  
秋風  
翁

香さくらしきゆのや  
秋風  
翁

檀の木れ  
秋風  
翁

梅  
湖春  
翁

山ハ  
翁

草  
翁



貞享三丙寅

初信然

其角

日のまらきをさすのうらむ 初の西ゆみは  
えおのりけをまわのうらむ ちかきまきと出  
ちかきけしきと初の西ゆみにけし  
つらねつらねきくおのりけの流るるに  
まの葉まきぬ

みきうにさし入る寺の桐の葉

文録

貞徳夫人の服体四さゆるとまらねけれ  
とも富村の古くまらうとまらねけれ  
まらねけれとまらうとまらねけれ

本枝のまらにけし枯る葉の桐の葉  
けしきとまらぬとまらうと桐の葉  
桐の葉のまらぬとまらうとまらぬと  
まらぬとまらぬとまらぬとまらぬと  
まらぬとまらぬとまらぬとまらぬと  
まらぬとまらぬとまらぬとまらぬと  
まらぬとまらぬとまらぬとまらぬと  
まらぬとまらぬとまらぬとまらぬと

ちかき村の枝にけしけし けし 枝にけし

松風

ちかきの体長きく風体まらぬとまらぬと  
まらぬとまらぬとまらぬとまらぬと  
まらぬとまらぬとまらぬとまらぬと  
まらぬとまらぬとまらぬとまらぬと  
まらぬとまらぬとまらぬとまらぬと  
まらぬとまらぬとまらぬとまらぬと  
まらぬとまらぬとまらぬとまらぬと  
まらぬとまらぬとまらぬとまらぬと



とらつら舟と棹さしてやう狂者の体  
況を桐のを太極すし素持と付る附船  
大切し

酒の 幌子入道の 月 口齋

四角目ふれは移しそその松竹海苔の  
まよふ折し付る幌の霞を庵かといふん  
おしむ夕の暮しきゆへし

秋の山も木もけろのちのさへん 芳重

秋のちのさへん市も折もつる金体さへん  
一し海苔子たさうさうの秋葉の付るこ  
る舟のさへんしふらうし秋葉を拵  
しつるのさへんはれもつるし

秋のちのさへん市も折もつる金体さへん  
又し人々を散らすし

炭かき 秋風

お白山家の体も尺折し付付る桐は  
まよふ折し山舞の炭電を拵るまよふ  
体も糸あまのちのさへんも炭のさへん  
附船ふ糸子 炭電の白を船のさへん  
まよふ折し山舞の炭電を拵るまよふ  
よくまのちのさへん

仙化

象のちのさへん 李下







ましやーいけやう様くーいよーい  
の姿そり眼をけし尺くし  
くき女侍もあをも富の尺あさめ  
あふを禁中くーいけいさくし  
ーをまきしきさし却し世をけい  
まもを能く親也  
あくされしわの本様のお度子  
富の只酒もくーいけいさくし  
くーいさの句を能く本様のむのさ。  
あく志やくさあめあひさほくし  
よう情能くさ五又言をさくし  
のり作か感情り

執筆

文麟

後任女きぬしーい  
後任女ハ後任の妻とて人あめく  
まれしとささし後任の物と和ささ  
あひをさえく謀あしーい  
子方の物やあひつるやさくし  
あひささくあひささくし  
山歩方乳とのむ様あさくし  
堪ハ里水も後任あさくし  
む娘於更科トけいさくし  
あひささくし  
あひささくし  
あひささくし

貫角

コ齋



山のうらと甲斐又の代とも尺よ  
松御

静のあやと一きよと山川のそけい  
一き御を形置一しつねをひねり  
神

はの去系別後を埋みまへん  
松御

袋の巻く物まきまきを尺し  
岩を敷く一と甲斐と古八古人佛出  
の古法もわろく自然とまきまき  
まきまきと利製をほくま他ま新く  
まきまきと矢竹の

と山一此記もすの竹の戸  
茅寺

あまふ一まはは果体とまきまき

伝あり

吸りとり車かまゆりあのけ  
李い

あひは名の御をとりとまきまき  
編を解く一かられ何人のひき  
あまふを日にかまき厚御と只白御  
白化の御とまきまき眼を過し

橋ハ小物をもとまゆり  
白化

まのまきまきまきのついで  
うすしとまきまき尺し  
かまきハまきまきとまきまき

あまふとあまふまきの  
朱弦

是又まきのけ一まきまきまきまきまき







中れし是より取がして白きかきし竹の尾  
おのりよし粒おきむのゆーひふりく  
かぶあゆー

紫糸の 風よ名い良きうよ入 コ腐

まん民切とて紫糸新しお白民家子  
一と武士の若とも子と取しき物あり  
なと尺けし作し大粒ハ物清なるの体  
を厚し一と白し成ハ中持する人の聲  
はく小粒子入厚舟を尺けしちよ  
たぬ一とふんされとも子なるをとり  
子ハあしり子結結のこもりけること意  
とや一かに

か、供とていものうけたる 狐篋 其角

敷うけのうきまはゆしと尺けしき  
も白地紙帳をぬきけし思ひまに  
いひ持しと白紙心をせし

ゆきまし 月夜のかまら かくろき 久鶴

その初め感懐ふ体もその尺けし傘  
葉の海をいし無何のきつと月をいし  
尺けしむかきしとら一狐篋とてその  
子けけするはらり

石の戸櫃籠りし竹子きすみ了 岩白

妻のこきむるよとてかき風冷し  
ゆめものもとてかき籠りよとて



身の上をいへば昔は小の出や一礎子  
次子の満十市の里芳世の里五川なす  
附く後茶子伝く付るゆきはねの  
源系を子不二月と史料し付るを  
時八白の形家よりうきとをいふ  
むいゆめより

これ三代の刀一丁張治 李心

はり後中の素特し新子む人し  
付くし伝ふ昔ふとや物と伝ふ  
石の戸極なりとて一張治をいふ  
よきとて伝ふし清き伝は水なり  
ひた剣を歩くはむいより一白

かぶる三代とてし粉骨の張治の  
名人とせん

永福ハきとく松の風 仙化

永福ハきとく松の風  
おほくハきとく松の風  
いとこおほく松の風  
よく心きけし張治す

近江の田植美徳子 柳む 朱伝

古代の傳し金とてし昔とてし  
昔ハ物とてし金とてし昔とてし  
人しとてし傳し付る美徳子  
よし田植なるの風はきとく











さよちよりにけりまゝ一毒の中此れわ  
うり安楽の心を乞有る一之の念を  
白きんく

世角

何く世の救れ海をくく  
おのの襟をよくきくく  
ゆる武士の体もわ  
まの九白の巻く  
能勝

文能

船の一をくくく  
たんに附れきひく  
まのくくく  
まのくくく

よきくくく  
仕きくく  
けれれれれ  
か  
く  
紀の館  
海  
之  
稲  
そ

李正

岸白



おもひにけし海に秋の萩の花をよみし  
はききあふふ 聖 叶 けり 愛と名 栞風

此の付録一白又長文にして物遠く園の  
萩の穂委びのしとす 叶ふ 聖 叶  
叶とて 叶とて 叶とて 叶とて 叶とて  
おもひにけし海に秋の萩の花をよみし

楊水

人阿まうとて事とて 物とて 叶とて 叶とて  
叶とて 叶とて 叶とて 叶とて 叶とて  
大悔りの萩をよみし 叶とて 叶とて 叶とて  
叶とて 叶とて 叶とて 叶とて 叶とて  
か何きとて 叶とて 叶とて 叶とて 叶とて  
おもひにけし海に秋の萩の花をよみし

酒もりのいふむ 金山り 洞 未弦

金山の系部の大徳とありとて 叶とて 叶とて  
くく 叶とて 叶とて 叶とて 叶とて

右も葉部の徳とありとて 叶とて 叶とて  
くく 叶とて 叶とて 叶とて 叶とて

叶とて 叶とて 叶とて 叶とて 叶とて  
玉川や萩のく 六つ叶 葉とて 叶とて  
は 叶とて 叶とて 叶とて 叶とて  
叶とて 叶とて 叶とて 叶とて 叶とて  
葉とて 叶とて 叶とて 叶とて 叶とて



竹うらさるさハ夜かこよ休  
 南むくき屋の柳のちあきし  
 親と暮るし折屋のつれし  
 餅化しあらの度あまを折合を  
 糎子買し秋のころり  
 唐のちもものさぬ人もあつし  
 ぬき男のつれあすむ月  
 蓮の雨枝七里をぬきし  
 作約河内のみを川つ  
 多車米つてくるゆ  
 梅ハさうり院くそ閑  
 二月の蓮葉人もすさあ

楊水  
 不卜  
 久鶴  
 松風  
 翁  
 朱法  
 不卜  
 李下  
 楊水  
 甘角  
 子鹿  
 二富

姉まのまはをふりの氣  
 胸のぬれ裁の端を織るの  
 ぬもひゆくさう若の菊さ  
 菱の葉をさうみあつた之  
 木魚あゆみ山うけし  
 団をやし休むる折月  
 秋さしあつたつれあひ  
 同し時あつたあつた付  
 くらあつたんあつたか  
 と度徳芳あつたさうし  
 名  
 契情をさうぬきあつた

若重  
 翁  
 松風  
 久鶴  
 李下  
 口高  
 不卜  
 子鹿  
 朱法  
 仙化  
 李下  
 文藤



煙らみ習ふありのくつくー  
外海ふ笈折子驚うー  
梅生さ昔ふあわ山あうー  
村あう石のともー火吹けーぬ  
地とる花の伸とま川うー  
伊あもこのる内うありのあうー  
梅とくきく橋つくー秋  
行長のゆさされの世やあゆー  
尾すくゆー唐玉の火  
紅う牡丹十里れまをふー  
やうさむ管うあうゆとー  
岩根端ゆもふ地をあ山すく

芳重  
岸白  
コ吉母  
咲水  
仙化  
不卜  
李石  
柳水  
文録  
玉吉  
咲水  
岩角

あくや三井のさの住山とも  
道ぬ道うーあふ奴う返家ー  
管弦をさうすあ月ハ流ー  
足成の庵山うーうの海ーさよ  
子あう唱う観あうの海あ  
舟いーつ海みあうの川傳心  
をふーうーさーの松の志ーう  
宿むーろの七符あうああ  
まらぬくーうさう久ーき

コ吉母  
仙化  
芳重  
柳水  
岩角  
相風  
咲水  
不卜  
岸白

久のくやうあ燈くー助を在

古本  
一頁喜しう題

古本



旅ある友をさきさき山こす喜  
かたハアア極の葦掃墨  
よしこはまる一歌の  
月ふれく燈火あふ海の上  
味の塵子吹吹きのおと  
牛嶋子給持をく羽折る  
右位阿くく美女百々を  
提灯子大蟻蝎の言り  
おのりふす字の材木  
おのりハ舞子花の香の宿  
仇人のおのりおのり氏を  
仇人のおのりおのり氏を

扇 其角 嵐雪 扇 末 角 末 角 末 角 末 扇

ゆき付く 葦の 空  
峰一送了八重山もとの火の  
軍の加減うとき長おひ  
七は心くぬ月も  
活生くうけく板東の帳合  
高徳山陽方清うはう  
小娘 後細く葦花の中  
丁寧もさささささささ  
表まもさささささささ  
はらさささささささ  
冥かきくお食すめおほえ

末 角 末 扇 末 角 末 扇 末 角 末 扇



毛體を——きと画のそり  
 くらひの底のふり十景 家  
 りそり夕時そ 醉さるの月  
 きうくはひのしほりのあけあふ  
 豈にくすしき宿の程既也  
 づ川とともふ部の後たの片燃り  
 四の処を過りそとて家の子  
 鼻つらむ昼より夕の生 看  
 ちとらつちきけりぬそりあきり  
 縄きれく架本を吹る花もらふ  
 此の心葉のそけり長可き

角 翁 末 角 空 末 翁 空 角 翁

三月廿日

是頃そ七の都見の物もこり  
 慣る柱はわらわ 細橋  
 足踏本をまきつてお代——  
 宋一外をまきつて 算の戸  
 名有冬 疎ハ之病とこ子 松  
 杖尺とこ——き 柳の葉を菊  
 善名そくハ虫はかろき  
 肉かたの向き川うあう  
 既子立付あひの使のあし  
 一巻の巻り 踏らつけと侍  
 和のそり 虫足んハハ其ハ侍

角 翁 末 角 空 末 翁 空 角 翁  
 清風 岸白 曾良 口齋 甚角 風 白 良 翁 角



生々控子れあらしきり  
影かこらしめ敵をきりあけ  
しし餅をわきよ山寺  
きを杖控やさしにあはし  
虹の付しめハリス白のあ記  
流子さハ澄泉をさすハ月を  
三内く麻糸のハ夫を戻  
いきくと年子きけり約しき  
男あらしれ白糸をぬれ  
膝裂し明の風鈴を忘れき  
ふくくあらし牡丹菱つ  
耳くく妹、告く、鄭云

風良富白角霜  
風角霜  
霜角霜  
霜角霜  
霜角霜  
霜角霜  
霜角霜  
霜角霜

泣きまみみ使し草花を  
れ焼てカモウハハ侍  
系くハ髪を尾れハ  
揃取葉狂舞やきくよみき  
子の力あハきをく  
物くく物やお人のハ  
眉ぬく袖の翠髪をく  
白のまみまぬまを  
葱のまみま山  
まきま蓬髪を  
何やまくく  
おまみ裁まのまん花

風良富白角霜  
風角霜  
霜角霜  
霜角霜  
霜角霜  
霜角霜  
霜角霜  
霜角霜



車を下る喜の体は心白

和漢

破風はさしと影や弱く夕すま

慈葉蠅避烟

合歡醒馬上

かき多し小洞のまはるる

月代見金氣

露盤懸添玉波

弦地は物古きくさるる

帷を在るるをみる

習第 驅偷鼠

篇

事

篇

篇

事

古ふおろしあはるるお魂を

是の如首をいふる杯の撥

乳をの心線子何と見

舟鐘風早浦

鐘絶日高川

魚をくさるる子や向の境を

食ハすけぬぬ火のうけ

託教三社本

韻使五車填

花月丈山開

薄を杖つくむのくさるる

剪銀鮎一寸

篇

事

篇

事

事

篇

事







花より草やと酒造りし  
みよきものにはなれぬ 蘭の香  
志らくきのの煙の垣をこえさす  
指張を標の柱より崩れゆく  
みよきもの 髪を直ぐかんき  
細くもふ取火のつみよきもの  
何と焚火のふれぬ 煙  
構の月ひららのもよきもの  
遠くふもよきもの 雲のまよきもの  
木念のゆの 礎や等しくん  
四十夜了る 風もよきもの

霜雪 為 花 法 菊 沾 菊 沾 菊

手立や草舟の乳ハ星月秋  
草 紅梅もたけむる 残  
春もよきもの 子おほく  
山より尺のふりゆく 花の何  
ひらく 只よきもの 雲子川  
故き 子 ちよきもの 秋より  
有のゆすくもよきもの 鶴の刻みよ  
帆を八合より 棹 郎の舟

其角 今我 若翁 松風 船棠 横儿 菊 仙化

菊



其角のつゝの体よりいへる協の菓 其角

漆きぬ芳やゆゝぬ菊の友 素堂

葛の蒲ふく秋のまの園 菊  
鮎よこく露の目くくるみまを 沾圃

貞享四丁卯

松のつゝの香をこゝろに芳の香をまらる

きんこをやす

時を秋よりゆゑにたし松のつゝ 香沾  
月をこゝろにゆゑにたし松のつゝ 菊

山をけりて其の田の秋のみまをいへる	沾圃
武者神のつゝは 早川のいへる	其角
そよよよの香をこゝろにたし松のつゝ	香沾
かゝるよの香をこゝろにたし松のつゝ	菊
あまの香をこゝろにたし松のつゝ	香沾
あまの香をこゝろにたし松のつゝ	沾圃
行尽くす玉天のつゝは 其角	其角
髪をぬりて其の香をこゝろにたし松のつゝ	香沾
香をぬりて其の香をこゝろにたし松のつゝ	沾圃
香をぬりて其の香をこゝろにたし松のつゝ	菊

口口







江戸さくら心かきせんいし時  
養蠶のまゆりふらふら月  
貝ひらひしゆく残な行く  
酔ふハ人の肩よりさうく  
ふしの知れしそまらねた父の  
根松苗救蟬の啼き  
池の穂こぼれぬ垣越え  
みふと入帆のゆるる屋根茂  
奇の中を画のうれゆる舞の狂  
妹のかりらねる猫やさき  
記念つふ袋のきれさうく  
あつと占まきく室のあつ風

濁子

篇

鼠雪

其角

篇

子

角

子

雪

篇

子

はのふねふよはしと物かき  
二枚のまゆりの花をさうく  
一巻の巻をさうくむす  
苗代もゆるるあつらふ  
養蠶の集いしゆくあつらふ  
仙五下あつらふあつらふ

篇

雪

子

雪

篇

子

同

濁子

其角

篇

仙化

多きや人ききぬ市の物  
味をさうくふ入あつらふ  
手の負徳やゆくあつらふ  
火をたぐ舟の星さうく











昔の氣多きものも初より一し  
 ねらぬるもくもくも偶偶  
 途中より立ち去るの意を  
 伸こくおきめられしハ陰  
 影の如き片のつゞけを  
 みるも原をゆく手  
 明の鳴き声し浮き入  
 蓋のぬれぬのまき焼  
 光のぬれぬぬれぬれぬれ  
 君もくもくもくもくもく  
 的く焼く干焼のねもくもく  
 いのちもくもくもくもくもく

化 峰 之 空 吹 水 化 之 篇 吹 角

起出くもくもくもくもくもく  
 走くぬおきもくもくもくもく  
 射くもくもくもくもくもく  
 小細きもくもくもくもくもく  
 子の戸もくもくもくもくもく  
 常尺もくもくもくもくもく  
 甚おきもくもくもくもくもく  
 懺もくもくもくもくもくもく  
 海牧也の篇もくもくもくもく  
 傍もくもくもくもくもくもく  
 尺若くと文もくもくもくもく  
 場の中もくもくもくもくもく

空 角 吹 水 化 之 篇 吹 角











肩をすくもつるも物さういれ女  
宗手おひつるもあけりあうみく  
干飯のあはれ法走さるやまき  
見し来りる布の苦さある屋の法  
涙しつるも融けぬ物ほしく  
門法の前尺の人あうりう  
笑すりあもる唯一の輪妻  
能くはに宿さうう海磯の  
夜のあつさうと輝つてあう月  
うあしと律儀のせの信あつ  
唯しもしつるも物さういれ女  
尼寺のまあうりうと志をく

舟泉 執筆  
洞 泉 水 子 翁 人 泉 洞 泉

物瓶さけりハあはれとさう  
夕のほの輝さうつる人さよ  
布杭二本さうりうさうき  
皆ら花一妹をあつる人もあ  
食さうとさうさういれ女  
旅さのあはれもさう物さういれ女  
くふ髪剃りか茂川のあ  
増のまうりういれ女のあはれ  
ほろよ平射の杖さうけり  
月さのふれ髪をけりさういれ女  
物さうりうあをさういれ女  
ハ橋をさう保りさういれ女

泉 翁 子 人 洞 水 泉 翁 子 人 泉



山ひよわいしつり神く  
志こけけろ殿侍のちろた  
智ろろひろろ隙ろろひろ  
何ろろちろろろろ花の陰  
義の中ろろも横山ろろ

変水人洞変

早崎の園を尺どもや中ま  
船酒つっ海古の埋火  
築山のふろれろ梅を植ろけろ  
遊ろろ猫のまろろろろつ  
ろろの初夜を中月ろろのこ

業言 初足 自吹 安住

篇

一里のちろ母ろろ川上ろ  
初ろろろろ門ろろろろろ  
市ろろろろろろろろろ  
牛ろろろろろろろろろろ  
菊向のちろろろろろろろ  
月を伝ろろろろろ酒  
ろろろろろろろろろ秋の  
後ろろ初ろろろろろろ  
危造ろろろろろろろろ  
ろろろろろろろろろ枝  
吹ろろろろ飯の対ろろろろ

如風 重辰 足 足 風 吹 菊 風 足 足 辰 風







おし、八松かさきり風止る  
糸旭陽、る山のうけり  
種々花々、自然ふ、家のみ  
節、一、中、く、ひ、  
肌、さ、く、ふ、く、ぬ、  
こ、ほ、く、整、め、く、ろ、き、  
の、わ、く、種、め、ま、む、  
破、れ、し、玉、女、境、も、  
古、柳、を、ひ、く、さ、え、  
柏、夢、を、や、せ、  
松、吟、を、食、を、ひ、  
雪、も、く、し、れ、あ、  
五十五

紫、翁、紫、翁、紫、翁、紫、翁、紫、翁、紫、翁

就中、吟、の、礎、了、  
浪、泉、の、あ、え、了、人、  
以、端、の、女、の、  
津、位、を、  
新、有、  
中、  
有、  
所、  
初、  
物、  
能、  
湖、

紫、翁、紫、翁、紫、翁、紫、翁、紫、翁、紫、翁



折ゆらむ松も叫ぶるを  
 何れかの聲は虎月多  
 秋山の外籠を告る  
 第一節もかりか  
 優傷寒の伊藤つとむ  
 首人 起す夜、ゆり  
 恋ふ千ぬれ葉いさ  
 木の梅のほろ 増す  
 石の下の葉を多  
 喜の殺すはくみ

菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊

珠——やが葉の涙か菊  
 情士の葉と多あり  
 伊在の志はくく  
 珠を彼くくく  
 矢中此ありほそ  
 ろ——こはす  
 言のまは心をか  
 音くふつけ  
 木孫様とくぬ  
 とくん佛のそ  
 寺のちもこけ  
 放った葉の

菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊

如風



春の山花 秋の萩 冬の雪 夏の雨  
花の散る 萩の揺る 雪の積る 雨の降る  
春の山花 秋の萩 冬の雪 夏の雨  
花の散る 萩の揺る 雪の積る 雨の降る

春 夏 秋 冬 春 夏 秋 冬

いりきりよ 有髪の 信女 衣 夏  
冬 春 夏 秋 冬 春 夏 秋 冬  
花の散る 萩の揺る 雪の積る 雨の降る  
春の山花 秋の萩 冬の雪 夏の雨  
花の散る 萩の揺る 雪の積る 雨の降る

春 夏 秋 冬 春 夏 秋 冬



第拾二ノ人ト云フ一リシクモの事  
舟中焚火を入リ查メ紫  
区六丁布細干き了家尺一  
柄杓焼つて葎の中細  
のりまじり御如内の海探  
款一を揚り多量の収  
帷子平衾羽折も秋め  
食子縮くまゝ何れも  
神主も考へ大なる志  
塘尺一すく藁ゆい  
とわくと是等の法を

篇  
聽廣 如行 野水 越人 若子 執筆 雲 舟 号

待中ノ一 念佛  
忍心入戸をゆるぐ  
くき名を焼つる月々  
長き歌をほたるまみの  
人平抱れく船をゆ  
若の賀干りし物  
今まし梅を裁り幕  
是より人への  
に物きんを  
ふらふ保生  
於菴  
とらくと一扇入

人 水 舟 人 水 舟 人 号



妻もさる市の理 通る 女  
こぼつていそり糸栗の首しと  
手 鬼足しし みの出た 父  
布袋破は 次男の秋の風  
和 島の月  
ひらりと くるまは 文字を忘る  
葉 戸に けきそ 遊き 踊る ぬ  
ほし 了きわ くの 留る 末の ぬし  
あし 姿 けり 泣き けり けり  
亭の中 紅葉 登り 交り けり けり  
俄と 舟 屋を さまり けり けり  
旅衣 尾張の ぬれ 十葉 あり

水行 篇 人 行 変 水 行 水 行 変 篇

富士 画 けり 又 けり けり  
懐 けり 重 入る 花 相 けり  
新 和 けり けり 柳 あり けり

水 行 人

土月 二井 亭 無 けり

旅 之 物 けり あり 沙 乞 けり あり あり  
春 之 けり けり けり けり けり けり  
と けり けり けり けり けり けり  
我 旅 之 けり けり けり けり けり  
琴 持 之 けり けり けり けり けり  
浮 子 之 けり けり けり けり けり  
起 之 けり けり けり けり けり

一井 執人 昌 彦 彦 竹 東 睦



みよれー 登火の汗ぬらふはつ  
おしきろ又ふけらるるのきさよ  
乳をのむ子おあふぬし  
麻布を煤ひきけに織るよ  
菅ささくこ火の紅くこきりき  
又まの矢子ゆゆの雷のき  
るもゆりこぬ小隙のき方  
小男麻の衣火を袖に射付き  
飛りゆくはとあそびあそぶ月  
木うーに悴けき木の二三  
とくけつてくおはさるるし

菊 丹 人 碧 竹 勝 翁 人 翁 碧

錢別

時角(に)種かう豆ん字の院  
火焼の葉子 俊をつく人  
松風とそれとる 物をも足の  
物音ハとくき 湯の山お月  
種山と川と川かよふ秋のき  
葛の縄 面をゆらぬー文  
珠をさすいさ 娘のあそび  
餅ニうさく ぬきーさよ帯  
うーさよおまよるお松いん  
種ぬーゆりて 踏すー言

岸白  
翁 溪石 口齋 甚角 卜千 嵐雪 白 翁 石



同

志ろうのり 塔をゆきまの木の隆  
 一羽わうのり 子き 一志は  
 枯をのり しのし ねのみとく  
 回中一のそれ 通うそゆく  
 月おそく ねのち 散り  
 秋風上り 門の半 散  
 春の系 蹄を 通う 橋のま  
 布うハ 足をもし 三葉のまき 縁  
 松林 女ゆき しのあけえく  
 雲情 うけを かくし

松江  
 翁  
 曾良  
 依  
 泥芹  
 水萍  
 風泉  
 夕菊  
 苔翠  
 執筆

下りの秋 麻高の所より  
 夕のぬり ちり ちり 有らん せき  
 危をけり

深川ハす み色 咲ゆも 燈をうれ  
 まねをさけけり 崎の河 一法  
 初雷のけし ねれ 市のま 和えく  
 物とふ 月のち ね ねうみ 千  
 牛車 系おろ ちあけ 是安む

風濤  
 翁  
 一品  
 琴花  
 虚洞

舟のふと 母ふふ 高う 冷しき  
 香きし ねの みし ねの 香

翁  
 其角



いふしつものまじりたる月夜

松江

樹をよこす平たけあすあ  
秋もくましくさくのきし  
月とんとみゆふのぼるおほい

曾良

とを秋菊かたし人をたひは  
我をたせしあはれは侍良古時  
志し浪よする決まはる心  
切なき船のまをゆき  
懐食やゆき古のまをゆき

知是

砂をこころしきし  
松をぬく力子果るあはれ  
いづのさしけのゆけり  
脚さやうまのゆきあはれ  
くまのまかきし

越人

人

空照虎子旅ゆき  
墨染や更手松もをれ  
海すの子か解を去る貝吹  
明戸すの直手端こころ  
高よせん時名月を只年や

越人

知是

人

是



夢美の頁も通す一冊也 扇

写本強治出羽守氏雲定より 扇

水もたたく回井の大橋 自誤

船つぎく岸の三股花梅 知是

宇無彦知是の活人前をたすはる 荷舟

いくは紫それはし柳を渡山す 扇

秋ののちをそとてしつる所のし 知是

と約し月をす小舟を千般曲す 野水

里のねとくりに世菊折き 扇

市人千いさくはるん雪の空 扇

酒の戸たたく歌の枯梅 花月

釣のほろ先へ舟を引く 杜園

雲をよめゆりし行し空 如行

秋の文了まし竹の清き 夕道

船のそく擢もきくは磯の磯 荷舟

以のそくやききこゆる洲の魚 野水

海をく山より曇る雪は月 扇

陸つゝ秋の路をほく 荷舟



素心くさくさや  
みもとさうじに山  
壺の心 壺の心 壺の心  
野人

翁

いさよらハきん  
硯のくさくさ  
同 壺の心  
三十餘年  
故江

翁

あつし  
角のくさくさ  
云々

翁

何の本  
又云

貞享五年戊辰年

六十五







芭蕉翁不杖一して止ぬ

芭蕉翁の如く杖一して止ぬ

芭蕉翁の如く杖一して止ぬ

芭蕉翁の如く杖一して止ぬ

芭蕉翁の如く杖一して止ぬ

芭蕉翁の如く杖一して止ぬ

芭蕉翁の如く杖一して止ぬ

芭蕉翁の如く杖一して止ぬ

芭蕉翁の如く杖一して止ぬ

芭蕉翁の如く杖一して止ぬ

芭蕉翁の如く杖一して止ぬ

芭蕉翁の如く杖一して止ぬ

翁

業言

知足

如風

安信

自咲

重辰

吟

吟

芭蕉翁の如く杖一して止ぬ

芭蕉翁の如く杖一して止ぬ

芭蕉翁の如く杖一して止ぬ

芭蕉翁の如く杖一して止ぬ

芭蕉翁の如く杖一して止ぬ

芭蕉翁の如く杖一して止ぬ

芭蕉翁の如く杖一して止ぬ

芭蕉翁の如く杖一して止ぬ

芭蕉翁の如く杖一して止ぬ

芭蕉翁の如く杖一して止ぬ

芭蕉翁の如く杖一して止ぬ

芭蕉翁の如く杖一して止ぬ

芭蕉翁の如く杖一して止ぬ



時あつれん限杏吹らつ  
 笑うけりね毎の月を尺何し  
 心とすさむ家の中もきえ  
 親らしく夢う醒水たふけまつ  
 先初瓜を来り代あす  
 け村を時るみやううし  
 ゆうこころ櫻子舟はふらう  
 ものぬわう弦子也を引挽ぬ  
 だんさく跡う形垣の雲  
 正永 翁 光 危 人 近  
 人 色 玄

代きぬぬもあんな雨の花  
 翁

沖るおのぬあはあぬぬ  
 酒さやう水さう棹う棹さう  
 板屋くわあうう山  
 又さあ月を傘をうてさ  
 百うあ瓜をけりゆく  
 秋空く来一升う倉行く  
 膳すれ飯のたらさうき  
 吹けさあぬぬら未申  
 夕うあをうれ都人  
 とあうとらあを懐く  
 寺うあう業平の字  
 寺の中を鶴の屋にう  
 乙孝 一有 杜園 應守 葛森 翁 小 康 玉 翁 字 森







堀子の襦のかけつゝ一尺  
巻袴を手中に抱き袖の  
かくきは又の袖に袖も  
隙の隙ハなすもささ  
一里まゝしるふ青袴の  
あぢをささきし白く山  
たさうゝ赤袴のささき  
暖れやハさやかくか  
清義すみさささ梅の  
ささきしとととととと  
非人と執事しとら  
従ふぬしとととととと

水 翁 紫 履 行 端 梅 山 履 紫 翁 水

五寸と書く一寸の  
字梅は履のささき  
やうささささささ  
又してとわさささ  
何ととととととと  
古是れ石のささき  
ささきの杖をい  
お十二ささささ  
不浄をさささ  
細やあさささ  
おさささささ  
山履の花と古

行 山 履 紫 翁 紫 履 行 端 梅 山 履 紫 翁 水























藪の中より足ぬる草花  
秋の雨あけ霧をぬる草花  
月あやみぬ草花  
ひらりと人の心せぬ草花  
移りゆく草花  
木葉らるる枝の末も秋草  
はらりと草花  
道はるる草花  
霧より霧の中  
あけぬ草花  
死す草花  
石を動かす草花

長虹  
霧  
一井  
越人  
胡及  
風彈  
劫  
号  
号  
号  
人  
及

善くもくもく  
火よりくもく  
走らぬ草花  
高き草花  
井  
木  
色  
切  
さ  
人  
控

号  
号  
号  
号  
号  
号  
号  
号  
号  
号  
号











夢をう海をへ先あるのありての  
葉

秋風

あつた菊のうさへな程秋をさるる一也  
泥のうさへるる筋を千家根  
月依の海をふふるる筋のうさへる  
望のうさへるる玉をさるる玉をさるる  
あつたきくとおとわのうさへるる木  
えとく月をさるるうさへるる木をさるる  
湯物にさるる佛のうさへるる木をさるる  
荒れにさるる海をさるる木をさるる  
左義長の火をさるる木をさるる木をさるる

越人  
菊  
友五  
名菊  
依  
泥  
人

かゝるる庭をへ纏あるる月  
觸るる尺をへ人を引さるる  
えとくさけさるる名をへるる木  
春のうさへるる物の細をへるる木  
小袖のうさへるる木をへるる木  
淡義の筋をへるる木をへるる木  
うさへるる木をへるる木をへるる木  
雲をさるる花の木をへるる木をへるる木  
うさへるる木をへるる木をへるる木

風  
嬰  
五  
依  
風  
人  
菊  
五

苔翠亭

月をへるる木をへるる木をへるる木

越人



ねよりいし 倭 葉 垣 の 板 菅 翠  
 此君と名をいふ 昔の 家 落 了 菊  
 中ひに 仮名 ぬい ころは 習ひ 友 五  
 南より ありし 音も けり なく 夕 菊  
 よもきき きのこ くの 山 の 草 夕 菊  
 折るこく 花の かけの さい 夕 菊  
 女房も けり ぬい ころは 習ひ 友 五  
 就身と 物ありし 昔の 友 友 五  
 瘡 ねと ありし 昔の 友 友 五  
 まる 牛 ぬい ころは 習ひ 友 五  
 きー けり ぬい ころは 習ひ 友 五  
 秋風 ねと ありし 昔の 友 友 五

管の 花は ありし 昔の 友 五  
 けり ぬい ころは 習ひ 友 五  
 仲り ぬい ころは 習ひ 友 五  
 店人の 話 ぬい ころは 習ひ 友 五  
 破る 牛 ぬい ころは 習ひ 友 五

涼川の歌

花の 花は ありし 昔の 友 五  
 酒きい ありし 昔の 友 五  
 着る 牛 ぬい ころは 習ひ 友 五  
 理を ぬい ころは 習ひ 友 五  
 瓢箪の 大さ 五石 ありし 昔の 友 五

越人



風子 吹花 帰 市人  
何より長安はるれ名利の終  
醫のおちや丁々のる 俗人の  
いさしと 沙老のやまをむく  
ひく 世はやく 寺の法  
只 里より 古ふま 昔の 名を 終  
足 終 さら せぬ 雨の 砂け ありの  
きぬ く や ぬまう か ぬまう や  
風 吹 ぬまう ぬまう ぬまう  
ま ぬまう ぬまう ぬまう ぬまう  
物 ぬまう ぬまう ぬまう ぬまう  
月 ぬまう ぬまう ぬまう ぬまう

人 人 人 人 人 人 人 人

風子 吹花 帰 市人  
何より長安はるれ名利の終  
醫のおちや丁々のる 俗人の  
いさしと 沙老のやまをむく  
ひく 世はやく 寺の法  
只 里より 古ふま 昔の 名を 終  
足 終 さら せぬ 雨の 砂け ありの  
きぬ く や ぬまう か ぬまう や  
風 吹 ぬまう ぬまう ぬまう  
ま ぬまう ぬまう ぬまう ぬまう  
物 ぬまう ぬまう ぬまう ぬまう  
月 ぬまう ぬまう ぬまう ぬまう

人 人 人 人 人 人 人 人











花の影をくらん梅は早次  
 赤燈の面を酒の食干す  
 朝鳴りやうき旅をのち  
 精いさゝか紅の馬路の影  
 火を焚き世をさし一吹く秋  
 てしと探おく虫のおり宿  
 朝白子むらさきく珠あつた  
 生花の尺女くき人のくち  
 歌うくくくくくくくくく  
 去のさあきももももももも  
 蔓のぬくくくくくくくく  
 不二宿の心だたきくく松

宗波 友五 菊 水 良 通 波 菊 水 良 通 菊 水

母の佛へ浅後子くくく  
 片桐く白蛇の桶を片並く  
 濁くをさすくす砂川のぬ  
 花もすくくくくくくくく  
 破れ扇の骨をけくくく  
 秘結をさく性子ぬけく  
 後くくくくくくくくく  
 さんと子娘の顔もまき  
 いやくくくくくくくく  
 ぬかすぬかすぬかすぬか  
 くくくくくくくくくく  
 菊原子くくくくくくく

水 五 菊 通 菊 水 良 通 菊 水



嵐の山をこぼれし  
秋山より山吹の  
こぼれ人ともくこけし  
おとれ九何をも  
心とけし入るから  
て字のついでに  
すあこころの  
件をほめ  
百く  
花の舞に男  
笑ふ

菊 五 通 良 菊 通 五 菊 水 五 菊

を  
く  
さ  
何  
お  
一  
人  
か  
う  
あ

出  
通  
菊  
友  
曾  
宗  
嵐  
雨  
夕  
緑  
通



カカラすらふくく一億  
放されく細くむ牛の夕涼  
汗くく汗く降く秋の稲葉  
西のく像をあすく海の月  
汗の汗くむ碑の汗の汗  
若生を杉木の花の植ま  
まのまのい子母衣ま  
館を此處をわくく多敷の里  
中火替押くそか  
竹のまの石とやまのまの  
丸輪ハ首くまの石の塔  
一かみのねくく汗く汗

五良五竹涼通良洞彼水五翁

むくろくくくくくくくく  
秋空くくくくくくくく  
寂くくくくくくくく  
くくくくくくくくく  
くくくくくくくくく  
生木を越すくくくく  
かくくくくくくくく  
汗四子人あえて汗  
昔まもあまのくくく  
汗平ハ猿ハ小猿もを引  
優優優優くくくく

五涼通良洞彼水五翁







あふさかへに花子ちひさぶ  
男多し妹すよれをまへて  
涙欠梅子鼻跡をわす  
老ゆ花ハ針のそすの背ける  
子あうく傍好えしうきま  
蝶のあふ茶碗二ハもを置け  
ゆきみすくく旋きこえし  
甲斐信濃身をゆきし湯海  
雲さうされくおちく和能

蜀通五水通良波五  
雅良

雲の湯子跡をまへて

蜀

まへてゆきおちく梅子  
雲の湯子跡をまへて

蜀  
探丸

雲の湯子跡をまへて  
二人くく大あふ瓜  
裁物の麻のきよ端快ひく

蜀  
蘭指  
其角







風を懐くはひたひたの  
杖の安あしは漢の地  
和を懐くはひたひたの  
足 篇

ひたひたの杖を懐くはひたひたの  
篇

木うきうきと杖を懐くはひたひたの  
篇  
よむかたはくはひたひたの杖を懐くはひたひたの  
篇  
杖のあしはひたひたの杖を懐くはひたひたの  
篇

杖のあしはひたひたの杖を懐くはひたひたの  
篇  
よむかたはくはひたひたの杖を懐くはひたひたの  
篇  
杖のあしはひたひたの杖を懐くはひたひたの  
篇



九冊  
抄  
日  
本  
書  
院  
藏



